
守護する御主はギャングスター

ロード 14 / 14

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護する御主はギャングスター

【Nコード】

N4727F

【作者名】

ロード14 / 14

【あらすじ】

「行くぞ、逃げ続けるぞ。見つかったなら仕方ねえ……迎え討て、エリー！」「仰せのままに。我が御主。」ヤクザな高校生『篠崎響』。超絶美女の殺し屋・自称『エリー』。義父が義子に課したの是一年逃げ続けること！！世界中を周り続けて、二人は逃げ続ける！！追っ手の刺客はハンパじゃねえやつばかりだが、こっちだつてハンパじゃねえ！！果たして二人は生き残ることが出来るのか！？なおシリアス有りで、一応コメディです。ブツ飛びすぎてるためジャンルはコメディです

第一走：全ての始まり（前書き）

どんだけ書けるかわからないけど、主人公たちみたいに走り抜けて
行きたい
きっとそーいうモンになると思うから

第一走：全ての始まり

『人生の転機』とは必ず訪れるものではない。

人生において、自分の人生を良くも悪くも変えるのだ。そうそうあるものではなく、そしてそれはチャンスでもあり、落とし穴でもある。それを回避できるか、チャンスならばそれをものにするしかない。仮に不幸な転機であったとしてもそれを乗り越えれば人は成長できる。

要は可避不可避に関わらず、否応に関わらず、そして良し悪しに関わらずその人生の転機には立ち会ったほうがいいのかもしれない。ハイリスク・ハイリターン。

だがまさか自分にこんな人生の転機が来るとは思ってもいなかった……。

泣きたかった。

「響さん……とりあえず……今月のショバ代のアガリは先月を超えました。」

俺の周りにはいわゆるヤンキーとか不良と呼ばれるやつらがいる。ちなみに俺はそのヤンキーどもの頭だ。県内では知らないやつ等は居ない。ほとんどヤクザまがいのことをやっている。

売春、店の経営、他のヤクザとの商談、クスリの横流し。

正味な話、クズだ。

そして俺の名前は篠崎響しのさきひびき

高校3年生でその高校3年生も今や佳境に差し掛かっている。

目の前には卒業が留年タフリか。

だが俺には関係ない。

何故なら俺はいわゆる『勝ち組』というやつなんだからな。

運動神経抜群、成績平均ちよい上、喧嘩は負けなしでイケメンと来ればもう周りには人が集まる。

もちろん先ほど説明した不良やヤンキーばかりだが。

そして義父は世界でも五本指に入る資産家。

高校は卒業出来るし、卒業したら4〜5年遊びつつ勉強して会社に入って財産さえ相続すればあとは自分で事業を起こそうかと思う。

「それで、響さん、明日暇ですか？」

ヤンキー仲間の神原かんばらが俺に聞いてきた。

ちなみに今ダルい体育をフケて屋上で煙草をふかしているところだ。

「明日ア？まあ…多分暇だろうな。どうした？」

「いえ、花田のクソボケが上納金ちよろまかしたみたいで……」

「じゃ殺すしかねえ。」

煙草を踏んで火を消し、俺は立ち上がった。
最後の授業が終わったので今日はさっさと帰るつもりなのだ。

「帰るんですかい？」

「いや、飲み行くぞ。付き合えや神原。」

「じゃお言葉に甘えて。」

俺と神原は教室には戻らず、そのまま直でゲタ箱へと向かう。
下校する生徒たちの中に紛れて（他の奴らは俺達にカラまれないよう一歩引いていた）校門を出た。

校門を出た先にはいつものように俺用のプレジが出迎えていた。

「お疲れ様です響さん。」

「おう出せ。飲み行くべ。」

プレジに乗り込んだ後は神原が行きつけの店へ、というよりも俺たちが経営している店なのだが、そこへ向かった。

「おいトシ、この車車検通したンかよ？」

「いえ通してないッス。通らないンで。」

車内では他愛もない話し合いをしながら目的地までの時間を潰した。

着いた居酒屋は俺達のシノギの中でも結構な額に行く居酒屋。
なかなかデカいし繁盛もしている。

「ツラッシャイマセー！！あ、篠崎さん！！いつもの席で？」

「頼むワ。」

中へはいると馴染みの店長が奥へと案内する。今日も御多分に漏れず繁盛している様子がうかがえる。

だがいかんせん、学生服姿の俺たちでは目立つことこの上ない。

一般客全員に見られている。

そこに十人くらいはいそうなヤンキーの集団と目があつた。

「デメエ何見てンだ？」

目を合わせただけでカラまれるとは……

しかもコイツ等地元の奴じゃねえな？

じゃねえと俺らにツバ吐くなんざ出来るわけがない。

「デメエらこそいきなり何ケンカ売ってンだコラ！？グシャグシャにすんぞー！！」

売り言葉に買い言葉で神原が叫んだ。

一瞬にしてケンカムードになった。

「イキがつてンじゃねえゾ学生！！マジ齒全部ブチ折つてヤンか？」

「テメエらこそ俺ン庭で場違いにハネてンじゃねえよ。表出る。全員遊ンでやつからよ！！」

さすがに店内で暴れるわけにはいかなので十人全員を外へと連れ出す。

「ヒヤハハハ！！テメエ終わったゾ学生！！」

「酒に酔う前に自分に酔いやがつて！！その酔い俺らが覚ましてヤンよ！！」

あゝよく吠えやがる。

「吠えてねえでさつさとかかってこいや。テメエらこそウツカリ赤信号渡つてンじゃねえよ。当たつてイテエぞ？」

「飛べオラアツ！！」

完全にブチギレたヤンキースは十人一斉に襲いかかってきた。

ピリリリリリ！！

ピリリリリリ！！

ピリリリ……プッ

「もしもし？」

『あ、響様。ご主人様がお呼びです。ただちに帰ってきてくださいませ。』

「……後じゃダメなンか？」

『ただちに、でございます。』

「わあった。今からそっち行く。」

携帯の通話を切ってポケットに携帯をしまう。

「おう神原。俺用事が出来たから帰るワ。」

「お疲れ様です。」

神原は一礼し、俺はプレジへと乗り込んだ。

「俺ン家に向かえ。今すぐにだ。」

「アイサー。」

ケンカを僅か五分で終わらせた俺はトシに家へと向かわせた。

無惨にも壊された十人のヤンキースを後にして。

「ただいま。」

相変わらずクソバカデカイ屋敷。

ここに養子して来たときにはビビったが今ではもう慣れたものである。

つてか早く遺産欲しいなあ。

「おかえりなさいませ響様。お早いですわね。」

ホールの階段から降りてきたのはこの屋敷の家政婦の河本麻衣。

大学生で心理学を専攻していた河本さんはめっちゃくちゃ頭がいい。

それに加えきりつとした瞳、軽く赤みを帯た髪。

ピンクの唇。頼れる姉を連想させる美人だ。

先ほど電話を掛けてきたのも彼女だ。

やっぱ俺って勝ち組じゃね？

「旦那様がお呼びでしたわよ。」

「なんで義父おやじが？」

「さあ？私はそれだけ伝えるよう言われただけです。」

そういつて河本さんはさつさと仕事をしに他の部屋へと行ってしまった。

はあっと軽く溜め息を吐いて俺はカバンを自室に放り投げ義父の部屋へと向かった。

「入んぜ…。おやじ。」

挨拶をして義父の部屋に入る俺。

オヤジは机の椅子に座り、こちらを見ていた。

部屋の真ん中には応接用なのかソファアーがあつたので俺はそのソファアーにどかっとな腰かけた。

「ふむ。」

初老になるかならないかの年齢の俺の義父、篠崎哲也しのざきてつや。

会社はかなりでかく、先ほど述べたように五本指に入るが義父の性格は実質ヤクザに近い。

厳格な性格ではなく、どちらかというと放任主義でそれが今の俺を造った。

「義父おやじ、なんの用なんで？」

俺は欠伸をしながら向かい側のソファーに腰かけている義父に質問をした。

財産相続させますか？

なら願ったり叶ったりなんだけどな。

俺がそんなことを考えながら答えを待つとそれは答えではなかった。

「お前は……勝ち組だ。そうなるように育ててきた。」

いきなり俺の質問スルーかよ。
ボケ来ちゃったか？

「そいつあご苦労さん……それで、一体それが……？」

俺はわけが分からず聞き返す。
なんでかな、質問を質問でしかえしてばっかだ。会話じゃねえよこれ。

「まあ最後まで聞きなさい。お前は才に恵まれている。だが残念かな、勝ち組だがお前はその才を使わずに勝ち組にいる。」

「何が言いてえんだ……？おやじ。」

「お前は勝ち組であって勝者ではない。お前は戦ってはいない。」

はっ！！俺は日々自分と戦ってるがな。
それにケンカもかなりやってンぞ？

ついさっきもな。

「そこでだ。子供が出来なかった俺はお前を養子として引き取った。才のある男の子だと見込んでな、其の通りだった。まあお前は……才能と言ってもその才能は根っからの『ヤクザ』だな。」

にやりと笑い、オヤジは俺を見据える。

わけがわかんねえ。

「おやじ……。だから何が言いてえ？」

「ふむ。つまりはお前は打ち勝って人生の勝者になるか、それとも腐ったクズ同然の人生を送るか。てか死ぬかもという試練を今からお前に与える。」

何めちゃくちなこと言ってたんだこのクソオヤジは？

俺の人生幸せ計画を崩す気か？

結構先までプラン立てちゃったからキャンセルきかせたくないんだけど。

「ルールは簡単『逃げろ』。」

何からだ？人生からか？

「何から逃げんだ？」

「ワシが放った刺客から。当然刺客だからお前を殺しに来る。」

今新しい幸せ計画を建て直していた俺は驚愕の眼差しでオヤジを見る。

頭湧いてンじゃねえのか！？

「ツザケンなあ！なんでいきなりンなことしなきゃなんねんだよ
！！」

オヤジの胸ぐらを掴み叫ぶ俺。

シバいたるか？

いや、ハジいたるか？

「俺はもう長くはないはずだ。近々死ぬだろう。だからこそ、優れたお前に試練を与える。」

「死ぬ……だとお？」

俺は胸ぐらを掴んでいた手を離し、ソファーにもう一度腰掛けた。

「ああそつだ。死ぬ。だから甘ったれたお前を成長させるため、逃げさせる。人生において目的を達成することは成長を意味する。それを教えこまなかった俺にも責任はあるが。」

オヤジはにやりと笑って腰を上げた。

「さあ、逃げろ！！世界の果てまで逃げろ！！逃げてあがいて生き延びろ！！一年間、そして俺が死ぬまでな！！」

クソオヤジが笑っている。

この日、俺には人生の転機が訪れた。

てか人生の岐路に立たされた。

明日はどっちだ…？

第二走：ウォーニング（前書き）

キャサリン・セダ・ジョーンズの髪がすっげー大好き
なんでモデルの髪ってあんなにシヤラフワなの！？

手入りたい入りたい！！
指入りたい！！

あ、どうでもいいですね

第二走：ウォーニング

「やってらんねえなあ。マジで言ってるのかよあのクソオヤジは。」

俺は自室に戻り、力なくベッドの上に倒れこんだ。

明日の予定はキャンセルだな。

花田も殺すどころか今や俺が殺される身だ。

いきなりつきつけられた義父の言葉を信じようとはせず頭の中には明日の予定をキャンセルする自分がいた。だが同時にそれは俺があ言葉の心どこかで信じているということだ。

時刻は午後4時過ぎ。

昼寝をする時間には丁度良い時間帯だ。

「ま、とりま寝るか。」

制服を脱ぎ、上は裸で下は学生ズボンというスタイル。

ケンカで鍛えあげられた体がベッドのシーツの心地好い感触を脳に伝える。

このまま深い眠りに落ちてしまおう。

イヤなことは忘れたい。

「そして貴方は殺される。」

「ぬはっ!？」

ビクッた。かなりビクッた。

部屋には誰もいないはずだ。

少なくとも俺が入ったときには誰もいなかったはずだ。

忍のなせる業か!？

「あ…アンタ誰…？」

後ろから声が聞こえたが俺は振り向かなかった。

なんつーかその場の空気だよね。

俺に気配を悟らせないとただだ者ではないはずだ。
多分…殺し屋辺りだろうな。

「まあ…ぞくにいう『殺し屋』。」

ホラね。当たった。

「で、その殺し屋が何用で？」

俺は相変わらず振り向かない。なんでかな？

俺から振り向いたら負け？

声を聞く限りは女だな。

「まずはさ、振り向いていいから。」

か、勝った！！

「じゃ振り向くわ。」

何故かホールドアップでゆっくりと振り向いた。

さすが殺し屋。

髪は黒くて長い。

だが服は肩が露出し、下は俗に言うスパッツにスカート。

そして顔は上の上の上だ。

背は高く、厳しい環境の中で生きてきたせいか目は釣り目になっていた。

ま、つまりメチャクチャいい女だってことだ。

俺の抱いてきた女達と比べてもこの殺し屋が一番だと言える。

まあ黒い〓殺し屋だよな。

「じゃあ本題。私はね、仕事で貴方に会いに来たの。貴方のお義父上の依頼で。」

殺し屋は俺の顎に手を差し述べ、俺の瞳を舐めた。
案外と痛くない。

「つまり俺を殺すと？」

「あ？逆よ。『貴方を死なせるな。』それが私の仕事。」

「聞いたことねえな。『殺さない殺し屋』なんて。」

「私もね、初めてよ。ターゲットを殺さないなんてね。」

『殺し屋』はくすつと笑い俺の唇をなぞる。つーか態度がデケエなこの殺し屋さんはよ。

「で？どうすんのさ？俺を護ってくれンだろ？」

「正確にはあなたを殺しにくる刺客を私が殺す。私は『待ち刺客』。つまりあなたは最低限、自分の身は自分で護るの。」

なるほど。義父の言うように、護られてばっかじゃダメってことかヨ。

なんかハードル高くないか？

「それで、お前は俺に仕えるつつうことか？」

少し舐めた態度を取る殺し屋に俺は片手で軽く相手の頬を掴む。

殺し屋は押さえつけられた顔にもかかわらず不敵に笑い、顔の表情が変わったのを俺の手に伝える。

「どうだか？貴方が私を雇うなら仕えることとなる。」

瞬間、殺し屋は俺の手首を掴み合気道のごとき要領で俺は床に叩きつけられた。

喧嘩慣れしている俺はすぐさま受身を取るが、それでも叩きつけられた衝撃は凄まじく、肺の中の空気を全て吐き出した。

「どう？雇う？」

「……ゴフツ……申し分ない。いいだろう、雇うワ。精精敵をしつかりと殺せ。そしてまず俺を起こせ。」

「仰せのままに。」

殺し屋は俺の手首を掴む手に力を入れると引つ張り、俺の体を起こした。

俺は首をコキコキと鳴らし、殺し屋の眼を見る。

「仕えるにあたり……ルールがある。」

「どのように？」

「必ず敬語を使え。」

「仰せのままに。」

「今後俺に危害を加える行為をすんな。無礼を働くな。」

「仰せのままに。」

「ああ……それと……な。」

フツと軽く俺は笑い、片腕を振り上げ思いつきり頬に拳を叩き込んだ。

人を殴ったときの心地よい感触が俺の拳に伝わる。

その気になれば避けれたであろう殺し屋の女は、殴られた勢いのまま床に膝を着き倒れこんだ。

「さっきの詫びをまだ聞いてねエ。」

「……………ご無礼を……………お許してください。」

口から一筋の紅い血を滴らせ、立ち上がった殺し屋は無表情で俺に頭を垂れた。

一瞬、下から見上げられた時に見た殺し屋の瞳には俺への報復や負の感情など微塵も感じられない。

出来たやつだ。

心の中で俺はそう思った。
信頼を置くに値する。

「顔上げる。さっそく逃げんぞ。」

「仰せのままに。我が御主。」

凜とした表情で年下の俺にそう頷く年上の殺し屋。

俺と殺し屋、今日から一年間、逃げて、戦い、そして殺す。

最悪の三百六十五日が今幕を開けた。

クソナツゲエ一年が。

第三走：ラン・ベイビー・ラン（前書き）

最近のマイブームその1

寝るときにエンヤの曲を掛ける
時々ダイアナ・ロス

第三走：ラン・ベイビー・ラン

「ふう……」

カタカタとパソコンのキーを打つ音や、電話が鳴り響くとある会社のオフィス。

そこでひとりの女性が溜め息を吐いた。体の疲れを一旦吐き出して、キヤスター付き椅子の背もたれに体を任せる。

「ふう～かあ～れえ～たあ～!!」

あま色のロングヘアが顔にかかるのを鬱陶しいと思いつつも彼女は呟く。

「はむ？」

ふとデスクの上のパソコンに目をやるとメールが届いており、何かと思いつつも彼女はそれを開いた。

眼鏡越しの彼女の瞳にメールの内容が移り、彼女はそれを読み終えると閉じる所かパソコンの電源まで切ってしまった。

そのあと予め用意していたのか、引き出しから『辞職』と書かれた茶色の封筒を取り出して、上司のいるデスクにそれを置いた。

「長い間お世話になりました。」

「なんだね……？急に……？な、何故辞めるんだ？」

いきなり自分の部下から告げられた辞職願いに上司はただただ疑問符を浮かべるだけであつた。

「何故？そうですね、強いて言えば……面白いことに成りそうだからです。」

彼女は笑いながらそれだけ言つと上司に背を向け、オフィスを後にした。

残された職員は悠々とオフィスを去っていく彼女をただ見送ることしかできなかった。

「さて、質問したい。俺を狙つやつ等はどんなやつだ？」

生ぬるいような風が俺の頬を撫でるように通り過ぎる。

いや、季節は春で他の人には気持ちの良い春風に感じるのだろうか俺には気持ちワルイにしか感じねエ。

やっぱ死ぬかも知れねえと思うと人間全てがマイナスを感じるん

だなあ。

「その質問には御主^{おんぬし}、完全なお答えを返すことが出来ません。」

こいつ……舐めてんのか？

「そりやどーいう意味？」

「御主を狙う刺客は、私を除く全てになりえるからです。」

「今よ、聞かなきゃよかつたって思ったぜ。」

なんだそのハードスケジュールは？

今商店街を歩きながら話をしているわけだが、今この瞬間も危ない
ということか？

「そもそもそんなやつ等を相手に逃げ切れんのかよ俺アよ！？いくらお前が強くても無理なんじゃね？」

「刺客……私を含めて刺客は決して組まない。商売敵でもあるので、まあ特別なヤツらを除いてですが。」

「つうことはよ、刺客が刺客を殺すのもあるってことか？」

「まさに今、その状況なのです。」

道行く人々とすれ違うち、本当の一般人は俺のことなど知らない。
だが俺の顔を知っているやつは必ず……道をよける。

目を合わそうともしない。

眼が合ったら殴るがな。

「ちつくしょうがア……！！なんかよ、周りのやつ等みんなが俺のこと狙ってるんじゃないかねえかと思えてくるワ。」

「ありえない……とは言い切れませんね。金を掴まされたやつ等が御主を狙うために放たれたやも知れませんか。しかし大丈夫です。」

「何でンなことが解る？」

「私めが、御主を殺すものを殺すからです。御主はドンと構えていればよい。御主は御主に齒向かう者をその手で潰せばよいのです。」

クスリと笑う殺し屋は完全に護るとは言っていない。
だが俺に害をなすやつを殺すには変わらないのだから頼もしいといえは頼もしい。

さて、これからどうするかね？
逃げるアテもないしな。

「なあ……そいや俺はお前のことなんて呼びやあいインだ？殺し屋とでも呼ぶのか？」

ピタリと後ろを歩く殺し屋の歩が止まった。
別に歩きながらもいいんだがな、止まられると無性にメンドクサイ。

「そう……ですね……ならばエリーとでもお呼びください。」

「エリー……ね。」

俺は明らかに偽名であろうエリーという名を復唱した。

「さて、これからどうするかね。」

時刻はまだ夕方の7時。

普通の家庭ではもう夕食の準備をしている時間帯。

「どうするかは……御主がお決めになることです。」

隣には相変わらず無表情なエリーがいる。

「どっかに隠れるつつうのは無理だよな？」

「まず無理ですね。奴らは鼻が利く。それに隠れるというのは逆に見つければ逃げようがないってことです。」

言われれば確かに。

だが逃げるにもそのやり方が限られる。

「なあ、飛行機とかは乗らねーほうがいいよな？」

「完全に密室ですからね。墜落すればまず死にます。」

完全に国内に閉じこめられてしまったようだ。

「ですが……」

と、エリーが付け加えるように口を開く。

「ブローカー密輸入の手を借りれば出来ないことはありません。」

「ブローカー密輸入？」

聞き慣れない単語に俺は聞き返した。

「はい。武器の密輸、人の密輸。『奴』は必ず成功させてくれるでしょう。最も、他の同業者も使いますが。」

俺はふぐんと適当に相づちを打ちブラブラと宛もなく歩いた。

さて、本当にどうするか？

まだ三時間も経っていないので襲われる心配はないが、

早いとこ安心する場所に行くことに越したことはない。

ふと周りを見回すと辺りには民家はなくなっており殺風景な工場地帯となっていた。

あれ？なんかヤバくない？

「おいエリー。」

「はい御主。言いづらいですが既に敵が来ました。」

迅速だね……。

いい仕事してるわ。

「来ます……『奴ら』が来ました。狗^{ハウンド}です。」

工場の暗がりから、二人の男が姿を現した。

第四走：リダンダント（前書き）

御主と書いて『おんぬし』と読む

でも題名では語感のため御主と書いて『あるじ』と読む

だからエリーは響の事を御主って呼ぶんだよ

第四走：リダンダント

そこにいたのは、およそ俺が出会ったことのない人種だった。

体全身が黒づくめのコートで覆われ、手には怪しく光るナイフが握られている。

見ただけで悪寒が走る、『それ』を感じさせる一番の要因は異様なまでに濁りきった『眼』だ。

人が、人間があのような眼になることが出来るのか？
まるでベクトリとまわりつくような視線を感じる。

「ありや……同業者……か……？」

「はい。ハウンド 狗の連中です。」

エリーは喋りながら大きな鞆のチャックを開けた。

てかそんなん持ってたっけ？

「先ほど私は同業者は組むことはないと言いましたが……あいつらみたいなのは別です。奴らは組織で動き獲物を追い詰める。まるで狩猟犬のように……」

淡々とした口調で語り続けるエリーは鞆から自分の武器えものを取り出し

た。

何だ……？刀？ドス？

「奴らは殺しても殺しても代わりが利きますからね……ま、そーい
うのは何時の時代でも決まっているのですよ。」

エリーの武器がその姿を現した時……俺は言葉を失った。

刀？ドス？いや違う。

そんなチャチなもんじゃあねえ。

巨大な『爪』だ。

先がかぎづめのように曲がった鉄製の刃。

それが三本付いた同じく鉄製の箆手が計二つ。

その武器は……まるで確かな自信を漲らせた獲物を狩るための鷹の爪のようで、その武器を着けたエリーはまるで今から獲物を狩らんとする女豹のようだった。

「何時だつて……そうなのですよ御主、代わりの利く奴らは何時だつて捨てゴマなのですよ……」

長い髪をなびかせて吐き捨てたセリフは果たして『狗』の連中に向けて言つたのだろうか……？

俺には……まるでエリーが自分自身の教訓を語つたようにも聞こえたが……

「ここから先は我々の戦いです。闘うだけです……。私にはそれしか出来ません。御主、御覚悟を。」

エリーが爪を交差させた時、手は祈りに似たような構えを取り、社会の表に姿を現さない殺し屋がまるで神に祈りを捧げる聖母マリアのように見えた。

「お喋りはもういい、仕事だ。首を刈り取れ、心臓を抉れ。あいつ等を^{バラ}ブツ殺せ！！」

「仰せのままに、我が御主。」

エリーが構えを解いた。

否

祈りを辞めた。

薄暗い工場地帯は戦いにはうってつけだ。

人氣が少ないのと周りが騒音で囲まれているため気付く者などいない。

例え刃が交わろうとも断末魔が上がろうとも、だ。

「シャアアアアア!!」

暗いため視界が悪く、細かい動きは把握できないが、黒い影が忙しく動いているのは分かる。

「ハン……!! 飼われた狗擬きめ。」

不思議だが、暗いのに分かることがある。

それはエリーの戦う姿だ。

長い髪は動く度に絹のように流れまるで、まるで……そう……どこか『舞い』を連想させる。

「シャアアアアア!!」

「シャアシャアとウルサイわね。ショッカーかつつの。」

エリーは飛びかかってくる狗を身を屈めてかわし、振り向き様に狗の後ろから爪を突き刺した。

三本の爪は狗の胸を貫き、深紅の血を吹き出させた。

多分あの位置、肋骨も砕いたんだろうな。

「ギュー……ッあ……」

狗はビクビクと痙攣しながら血を流し、幾時もせず絶命した。

「おいあと一人はどうした!?!」

一人殺ったからと言って安心は出来ない。

もう一人の姿が見当たらないのだ。

「御主、後ろ!!」

エリーの声に反応する前に俺は持ち前の反射神経で裏拳を叩き込んだ。

「キシユエッ！！」

お、当たった。

ケンカで鍛えた俺をなめんなよ！？

「ツブネエ！！」

直ぐに狗との距離を取り、迎撃体勢に備える。

「さつきからシャアとか言いやがって言葉喋れねエンかよ低脳が！！」

「シャルアア！！」

あれ？速ッ！！

狗のスピードは俺が反応するよりも早く、為す術もなく俺は押し倒されてしまった。

「キシユエ！！」

殺られ……てたまるかよッ！！

「どけオラア！！」

隠し持っていた護身用のナイフを喉元に突き刺してやった。

「ギャハアアアアア！！」

「殺ったか！？」

安心したのも束の間、狗はナイフが刺さったにも関わらず俺の首を押さえつけ、俺にナイフを突き立てんとしていた。

んゝ多分低脳だから多少のダメージなんて意に介さないんだな。

多少のダメージじゃないけど。

「お疲れ様です御主。」

エリーの声がした。

かと思うと狗の顔がエリーの爪でステーキの如くバラバラに裂かれていた。

「ご無事で？」

「早く助けるよ。」

死ぬとこだったつうの。

エリーの爪に気を付けながら差し出された手を掴み立ち上がると、エリーは違うところを見ていた。

明後日の方角？

「どした？エリー？」

「新しい……奴が来ます。」

スンスンと犬のように臭いを嗅ぐエリー。

成る程ね、鼻が利くのかこいつ。

これじゃどっちが狗か分らんね。

第五走：シュレッダー（前書き）

もしも明日は世にも恐ろしい悲劇になると知ったなら、おとなしく眠りにつくだろうか？

諦めて受け入れる？

それとも逃げる？

……どこへ？

地の果て？

……どうやって？

ジェット機で？

……誰と？

たった独りで？

……生きるために？

……手段は問わない？

最終的には

自分以外何もない。

結局は

それが悲劇

せめて誰かを連れてくべきだった。

いややっぱり静かに眠るべきだった。

小話

第五走：シュレッダー

「新しい……敵か？」

「新しい敵です。」

コクリとエリーが頷く。

やべえな、沢山来られたら場所的に逃げにくいぞ？

「臭いは二つ……前から一つ、後ろから一つ。」

「挟まれてンじゃんよ。」

逃げ道なしかい。

エリーと背中合わせに立ち敵を迎えつつことに。

俺の目の前に現れたのは狗だった。

やはり黒づくめで。

あれはユニフォームか？

「貴様が……」

少し遅れて背後でエリーが毒づいたのが聞こえた。

狗に注意を払いつつエリーの目線の先を見ると一人の女性が立っていた。

白いスーツに白いミニスカとキャリアウーマンのようないでたちで、メガネを掛けあま色の髪の間から覗く目はとても綺麗だった。

つうか美人だ。

だがその格好に不釣り合いな馬鹿でかくて黒いケースは何だろうか？

一見するとデカイ楽器を入れるケースに見えるが。

もしやギターケースバズーカか？

「貴様が……まさか貴様が来るとはね？殺^{シュレッター}刃鬼！！」

「まさかこんなところで会うとはね『殺し屋』？」

何だ？何かしら因縁ありか？

「シィィアア！！」

「！！」

ヤバイ！！

エリーの方に気を取られてコイツのこと忘れてた！！

瞬時に俺との距離を詰める狗を迎撃しようとした刹那、背後から声がした。

「避けて！！」

エリーの叫び声で、一瞬早く反応することが出来たので、俺は横に飛んで狗の攻撃をかわした。

いや、『殺刃鬼』の攻撃をかわしたのだ。

「なん……ッだありゃあ？」

目の前にはまるで引き裂かれたかのように真っ二つに割れた狗の死体と、血で白いスーツを真っ赤に染めた殺刃鬼がこちらを見ているという絵図。

正気の沙汰じゃねえ。

死体を見慣れた俺でもこの光景には鳥肌が立つのを覚える。

「マジかヨ……！！冗談キツいつて。」

殺刃鬼の手には奴の獲物であろう、狗を葬りさったチェーンソーが携えられていた。

ただ、ただのチェーンソーじゃあない。

なんで刃が対になって二つも付いてんだ？
本来一つしかない刃が反対側にも付いているとは……

まるでスター・ウォーズのダースモールだ

驚愕する俺に、殺刃鬼は自己紹介シュレッダーをし始めた。

「お初眼にかかります我がターゲット『篠崎響』。我が主の命により、あなたの五体を……バラします……小便チビリながら死になさい。」

ドロンとエンジン音がして、けたたましい音と共にチェーンソーの刃が回った。

おーおー痛そうだな。

「頭からイキましようか？ 胴を真つ二つにしましようか？ それともお任せで跡形もなくバラしましよーか？」

「全部、却下だよ馬鹿野郎。」

んなゲームオーバー、オラ死んでもお断りだ。

あ、死ぬか。

「まったく……ワガママですねえ！ アナタは。いい男がワガママじゃあ最悪ですよ？」

「いい男に生まれたからワガママするんだよ。」

これが俺の人生哲学だ。

俺ならば多少のワガママを推して通る。

文句あつか！！

シュレッダーははぁと溜め息を吐いた後、二対一体になったチェーンソーを振り上げた。

「ま、その考えもありですね。どちらにせよバラしますが。」

こいつ俺の話を毛頭聞くんもりねえよ!!

だがまずい、このままでは俺は誰かわからないほどバラバラにされた肉片になってしまう。

かつては誰か分からないほど殴って顔の原型を変えたことがあったが、これはその報いか？

「はいはいはいちよつと待ったあ!!。」

「チイツ!!」

殺刃鬼の背後からエリーが攻撃をし、殺刃鬼はチェーンソーでそれを防いだ。

「アンタの相手はまずは私だよ。」

「殺し屋……お呼びじゃないよ?」

エリーは祈りの構えをし、シュレッダーを見据えたまま口を開いた。

「祈れ。『親愛なる主よ、私めの面倒を看てください。直ぐにあなたの下へと召されます。』とね。」

「相変わらずくだと……バラツバラにしてヤンよ!!」

再度、シュレッダーのチェーンソーがドルンと唸り、排気ガスを吐

き出した。

「掛かってきなさいイカレ女。」

エリーはクイクイと爪を上下に動かしシュレッダーを挑発する。

二人の女は顔に狂喜の笑みを浮かべていた。

「イイアッ!!」

シュレッダーは俺に背を向け、エリーへと標的を変える。

エリーは袈裟切りにしようとするチェーンソーをバックステップでかわし、攻撃後の隙のできたシュレッダーに爪を向けた。

だがシュレッダーは軸足を中心にその場で回転し、もう片方の刃で爪を受け止める。

「キャハハハハ!! 甘いあまいアマイ!!」

金属の削れるような音がし、飛び散った火花が二人の顔を照らした。

「硬い……わね。あんたのチェーンソー。叩き折るのは無理か。」

「叩き折られたら商売上がったんだよ。でも殺し屋、まさかあんたが男の為に動くとはね。」

「黙れ!!」

殺意剥き出しのエリーは目にも止まらぬ速さで爪を繰り出す。全てチェーンソーで弾かれている。

つか攻撃が単調過ぎるぞ。

あと爪跡が道路の至る所に吐いているが、後どーすんだよ？

火花がチカチカと飛び散り、ギャキングキツという音が辺りの静寂を消し去る。

「さて……そろそろバラしましょーか？」

振り降ろされた爪と突き出された爪をシュレッダーはチェーンソーを回転させて弾き、隙だらけのエリーの間合いに入った。

「綺麗な顔を削りだし〜削り取り〜!!」

「くっ……!!」

エリーにチェーンソーが襲いかかった。

第六走：キックアップ（前書き）

ジャンヌダルク見ましたけど面白かったです

戦いは祈りであると感じた

ミラ・ジョヴォヴィッチの体当たりの演技がスゴいね
てか美人だった

ってかジャンヌって聖人なんだね

第六走：キックアップ

（ヤバい……！！やられる！？）

「エリーー！！」

御主の声がし、私はとっさに横に跳び退くことが出来た。

「避けた！？」

驚きを隠せないシュレッダー！

私は転がりつつも体勢を整え、地を蹴って一気にシュレッダーに飛びかかった。

「きゃっ！！」

必死の攻撃だったがなんとか当たったようだ、右腕を切り裂きシュレッダーのチェーンソーが地面に落ちる。

「ガラにもなくカツとしてたよ。もう負けはしないけどね。」

「痛あゝい……ヒドいよ。」

「痛いように攻撃したんだから当たり前でしょ？」

全く……こいつはガキだね。
泣くなんて……。

でも……泣くことが出来るなんて……羨ましいな。

さつきよけたチェーンソーはどうやら私の頬を掠めており、頬に血が伝った。

「クソ！…どうしてくれようか!？」

シュレッダーは涙と右腕から血を滴らせ、次の事を思案していた。

「拾わせない。私はあなたがチェーンソーを拾うのを阻止する。」

シュレッダーの体がビクツと強張った。

一瞬の静寂が支配する。

先に動いたのはシュレッダーだった。

チェーンソーに手をかけようとしたところを、私は地面ごと抉り取るかのように切り上げる。

「キャッー!!」

「拾わせないからね。」

再度警告をする。

シュレッダーもやはり命が惜しいらしい。

膝を付いていたシュレッダーに私はさらに追撃をする。

シュレッダーは避ける勢いもあいつて過度な勢いで吹き飛んで駐車してあった車に叩きつけられた。

「私の勝ちだねシュレッダー。」

「そうかな？ いやそうじゃないね。 まだまだ戦うよ。」

武器は無いはずのシュレッダーはゆっくりと立ち上がり、車のドアに手をかけた。

いや、ドアノブとかじゃない。

ドアに手を掛けてそのまま……引き剥がしやがった……

なんつーバカ力？

シュレッダーは二枚のドア板を手に入れ、子供みたいに振り回していた。

「今日の殺り方は切り刻みから挽き肉へと変わります。 覚悟しろ。
三分後には豚の餌だ。」

「言ってる。 アンタこそ、一分後にはチョークの人型に化けさせてやる。」

もう何が何だかわけが分かんねえ。

俺は5時間程前までは日常世界にいたはずだ。

だが今、目の前に広がる光景は非日常的過ぎる。

シュレッダーとやらはドア板を素手で引き剥がすし、エリーは手に殺人用具を付けている。

「ハアアアアア!!」

「ハッ!!」

シュレッダーは当たったら間違い無く致命傷になる武器?ドア板を振り回す。

一つ言えることは……こいつらは人間じゃねえってことだ。

「アハハハハッ!!ホラ、ホラホラホラ!?!どうしたの殺し屋!?!さっきまでの威勢はどうしたの殺し屋!?!」

「相変わらず……よく喋る女だ。」

よけながら機を伺うエリーの頭上に、縦に振り降ろされたドア板が襲いかかる。

エリーはバク転してそれを避けシュレッダーを見る。
さすがにアレを爪で防ぐことは出来ないようだ

「ちょこまかと……何がしたいのよ？」

「あんたを殺したいのよ。」

あれ？

地面に叩きつけられたドア板がひしゃげてンぞ？

「おいエリー。」

「なんでしよう御主。」

エリーはこちらを見向きもせずを受け答えた。
まあ目が離せないし当然っちゃんあ当然だわな。

「いつまで相手してンだよ、さっさとズラかるぞ。」

大体こっちはあと一年逃げなきゃなんねえんだよ。

「あら、逃がすと思うの？」

「別に許されないなら無理矢理にでも逃げる。だから『逃げる』って言うンだよ。お前の許可云々なんぞハナっから知るかよ。分かったなエリー？」

「はい。仰せのままに御主。」

エリーは低い姿勢のままシュレッダーに近付き下から切り上げた。

「クッ……」

「それだけ長い武器なんだから、間合いに入ればこっちのもの!!」
どんとシュレッダーを追いつめていき、さっきの駐車してあった車まで追い込んだ。

「トドメ!!」

「トドメられてたまるか!!」

エリーの爪がシュレッダーを貫こうとしたが間一髪、ドア板を捨てたシュレッダーが身を捻って爪を避けた。

「ナッ!？」

「甘いあまいアマイ!!」

エリーの爪は代わりに車のボディーを貫いていた。
ガソリンが漏れ、あたりに嫌な臭いが立ち込める。

「フッフフン♪吹っ飛べエエエ!!」

エリーの鳩尾に、シュレッダー渾身のブローが叩き込まれた。

「エリー!!」

シュレッダーに殴られたエリーはゆつくりと宙に舞った。

受け身を取ることもままならず、無様に地面に打ち付けられる。

「おいエリー！？生きてンか？」

俺はゆつくりと抱きかかえエリーの安否を配する。

血は……吐いてないから内臓へのダメージは無いと見ていい。

「ゴホッ……ええ……大丈夫です。」

いや大丈夫じゃないだろ！？

結構…飛んでたよ君？

ストリートファイターの負けたとき位に。

「さて、勝負ありだねこれは。」

車にもたれ掛かりながらシュレッダーが言う。

その余裕は逃げきることのできない俺に対して見せた余裕だろう。

甘いあまいアマイ。

「勝負あり……だと……？」

抱きかかえていたエリーが地面に手を突きゆつくりと立ち上がる。
うん、大丈夫だな。

「勝負あり……なワケねエわな。」

俺もエリーの考えを察し、同意するようにシュレッダーに笑いかけ

た。

そしてエリーと同時に口を開く。

「痛み分けだ、馬鹿野郎。」

持っていたジッポのライターに火を付け、流れ出ていたガソリンに火を付けた。

先ほどエリーが車を貫いた際、流れ出たガソリンが此方まで来ていたのだ。

そしてこれも、作戦の内なのだ。

「まさ、か!？」

火は瞬く間に流れるガソリンとは逆にたどり、シュレッダーへと近付いていく。

「そして……お別れだシュレッダー。」

火は車へと到達し、爆発を巻き起こした。

これで人が集まりシュレッダーも俺達を秘密裏に追うことが困難になるだろう。

何よりも爆発で痛手を追ったシュレッダーはしばらくは再起不能のはず。

「クソッ!! 待てコラ逃げるなあッ!」

俺達がそんな言葉に律儀に耳を貸すわけなどなく、回復しつつある

エリーと一緒にシュレッダーから逃げた。

俺達は……逃げ切った。

逃走と闘争一日目

車一台破壊。

狗三人惨殺。

シュレッダーと痛み分け。

第七走：ライク・ユー（前書き）

人間が持っていてよかったなあって思えるもの

それは恐怖だ

深い意味で考えていくと色々な意味で人間を押さえつけてくれていると思う

もし人類に恐怖の概念がなかったらきつと人類は途中で滅んでいただろう

そう考えると昔のアメリカ人は神風がすげえ怖かったと思ったただろ
うなあ

第七走：ライク・ユー

シュレッダーの襲撃から一週間経った。

俺達は今中国の上海にその身を潜めている。

その後、密輸人^{ブローカー}の手助けにより国外逃亡が出来たわけだが、いかんせん密入国だからもう色々と不便だ。

「エリー、怪我はもういいんか？」

真昼の中華街、上海の名物上海力二を食べながら俺は尋ねた。

「心配に及びません。私は大概の傷はすぐ治る体質ですから。」

そりゃ便利なこと。

さて、やっと落ち着いて食事が出るのだから色々と聞こうかね。

「さてと……まずはエリー、『シュレッダー』……ありやナ二者だ？ あんな人間じゃあ出来ないぜ。」

俺がそう質問するとエリーは上海力二にしゃぶりついたまま手を止めた。

「……いいえ人間です。ただ異常に力が強い……それだけです。」

「異常に……ねえ……。」

実際目の前で見たけど熊にも勝てるだろうなありゃあ。
いや、多分ゴリラにも勝てるんじゃない……
俺は頼杖を突いて道行く人々を眺めながらそう考えた。

「付け加えるならば。」

突然発せられた一言に俺はハッと我に返た。
エリーは口を拭きながら俺を見る。

「裏世界の刺客は皆それぞれに特化した特性を兼ね備えています。
シュレッダーは怪力、私は超回復と……異常嗅覚と言ったように。
でないと生き残れませんから。」

エリーは説明しながら自身の鼻を指差した。

「つまりこれからもシュレッダーみたいなのが来るってか？」

「ええ。来るでしょう。」

冗談じゃねえ。

そんな猟奇的な彼女なんかいらねえし。

「心配には及びません御主。」

俺の心境を察したのかエリーが妖艶な笑みを浮かべ俺に声をかけた。

「私は何だと思いませんか？私は御主の折れぬ剣であり、消えぬ殺意であり、際限なき暴力であり、裏切ることのない下僕です。御主は一人ではない。全ては……御主の為にあるのです。」

「……………ッ。」

参った。

ここまで明確に忠誠を誓われたら応えるしかねえ。

こいつに信頼で応えるしかねえだろ。

「エリー。」

「はい。」

「決して、決して裏切ってくれんなよ？死ぬな、絶対死ぬなよ。信頼してんだからよ。」

なんか照れるな……。

「仰せのままに……我が御主。」

エリーはニコリと微笑んだ。

さて、これから御主はどうするのだろうか？

私は悪魔でアドバイスをする身でありこれからの動向を決めるのは

御主に他ならない。

私はそれに従うまでだ。

「でよ、エリー。お前これからどこか行きたいところあるか？」

「え？」

私はギョツと目を見開いた。

この人は、我が御主は殺されるかもしれない状況下であろうことが、『行きたい所はあるか』と聞いてきたのだ。

肝が据わっているのか、単にお気楽に考えているだけなのか……？
どちらにせよ私には計り知れない。

「何をいきなり……？私は御主の決定に従うまでですが……。」

「まあ……俺じゃ決めれないからお前に聞いてみただけだしな。」

御主はあゝあゝと力無い声を出して席にもたれかかった。

「一つ……気になっていたのですが……。」

「ン？」

「なんで御主は……その、こんな目立つ所で食事を？」

引つかかっていたことだ。

何故命を狙われていながら、わざわざ目立つようにするのか？
普通ならば直ぐに逃げるのが常套だろうに。

「……日本のヤクザってのはな、エリー。決してビビらねエンだよ。命狙われてンなら尚更だ。むしろ殺してみろって感じに派手にパーティー開いて飯を食う。いいか？ヤクザはなめられたら終わりなんだ。だからこーやって飯を食うんだ。」

「なるほど。」

「それにせつかくよ、世界中回るんだ。観光しながらゆくり行こうや。逃げ続ける？メンドクセー、メンドクセーから却下だ。」

この人は……どこまでヤクザなのだろう。

私より2、3歳位下なのにまるで組の頭のような振る舞いと性格と肝っ玉。

本当に……今年高校卒業を迎える人なのか？

「つうわけで、だ。エリー行きたい所は？」

まだ話を引つ張っていた。

「ならば……教会に行きたいです。」

殺し屋が教会など似合わないかも知れないが、私は意外と信仰心が厚い。

教会には居るだけで心が洗われる、ただそれだけがお祈りはする。

「教会……ねえ。デートに教会かよ。」

「デート？。」

私はその単語にピクリと反応してしまった。

いつもポーカークフェイスを装っている私だが、今の仕草は絶対に御主に気付かれたことだろう。

「何デートって単語だけでテンパってんだよ？お前のほうが年上だろが。」

「……すみません御主。」

私は出来る限り平然を装い、謝った。

この無表情の下に隠された素顔を悟られまいとしながら。

第八走：パーソナル・ジーザス（前書き）

自転車で片道二十分ほどの道を一回も足を着かずに家につくことができた

もちろん信号も踏切もある

でも一回も足はつかなかった

でもちよつと信号のタイミングとか調整したけどね

つまり人生もそんなもんさってこと

第八走：パーソナル・ジーザス

「で、何で教会だヨ？懺悔でもすんのか？」

今俺とエリーは地元の人間に尋ねながら教会へと向かっている。
幸い話によるとすぐ近くにあまり人気はないが、教会が一つあるらしいのだ。

「やはり……………変ですか…………？」

「いや変じゃねエけど…………。」

その後はあまり喋ることなく教会へと足を運んだ。

俺とエリーが到着した町外れにある教会は俺が想像した通りの教会で、屋根の上には巨大なベルが備えられていた。

「へえ……………初めて教会なんか来たけど、こんな感じなんかよ。」

「なかなかいいものでしょう？さ、中に入りましょう。」

エリーは扉を開けて教会の中へと入っていった。

教会の中は少し暗いように感じられたが多分静けさからそう感じられたんだろうな。

規律良く列べられた長椅子に、大きなパイプオルガン。

結婚式も出来そうだな。

「……………」

俺は無言で辺りの物を見回した。

シャンデリアに、パイプオルガン、天井には巨大な燭台。

そして聖母マリアだと思われる人物が描かれたステンドグラス。

とても綺麗だった。

この俺が、思わず言葉を忘れたのだ。

「いいところじゃん。教会。」

「そうでしょう……？ふふ！！」

心が洗われるというよりは、心が落ち着く。

ステンドグラスから差し込む日の光が、静粛な教会を一層際立たせており、時が経つのを忘れてしまうような感じになる。

いや、この教会自体が外界とは切り離された場所のように思えてくる。

「おやおや巡礼者ですか？それとも見学？」

ふと背後のドアから声が出たので振り返ると、そこには黒い紳士服を着込んだ老紳士がいた。

足が悪いらしく、一歩づつ歩く度に手にした杖の力を借りてこちらへと近付いてくる。

「ふう……どっこいせ……嬉しいね……こんな町外れの教会にも若者が来てくれるとは……。」

老紳士はハッハッハッと笑いながらゆっくりと長椅子の一つに腰掛けた。

「あんたは……？」

「名乗るほどのものではない。しがない老人だ。ただのな。」

老紳士は再びハッハッハッと笑うとエリーの方へと目をやった。

「そこな美しい君は何故教会に？」

「……別に……ただ好きなだけ。」

おいおい無愛想だな。

つうかただ好きなだけって失礼じゃねえンか？

「ハッハッハッ。好きなだけ、か。まあ人それぞれあるからな。」

へこたれない老紳士は愉快そうに笑い、もう一度俺を見た。

「君は……そうだな。今悩んでるから教会に来たのかね？」

「当たらずとも遠からずって感じだよじいさん。」

俺は適当にそう答えた。

なんで年寄りってのはこう話したがるんだろうかね？

別にウザくはないが。

「じゃあ逆に聞けどさじいさん、じいさんは何で教会に来たんだ？」

俺はじいさんに質問を返した。

エリーもいつの間にか俺の背後に立ち話に加わっている。

「私が来た理由？そうだな……敢えて言うなら、救われたいからだ。」

老紳士は一旦話を区切ると磔刑に処されたキリスト像を見る。

「我々は……どうしようもない生き物だ。まだ在りもしない未来に怯え、もう存在しない過去に脅えて争う。私は……特に汚い人間だからな、ちよくちよくと教会には足を運ぶよ。」

俺は老紳士と同じくキリスト像に目をやった。

差し込む光で目を細めるが、視認は出来る。

「生憎と、神はあまり信じないほうだからな。」

「それもまた人それぞれだ。必ずしも神は信じる者を救うとは限らない。」

老紳士は席から立ち上がると杖を両手で持ちだした。

ガキン！！

何が……？

何が起こった？

今日の前に居るのは老紳士とエリー。

ただ老紳士の手にはいつの間にか刀があり、エリーはそれを『爪』のしまわれた鞆で防いでいた。

「何の真似だご老体……？」

「流石だな殺し屋。聞きしに勝る腕だ。」

まさか……このじい、俺を殺りに来た刺客……なのか！？

このじじいが！？

「名乗らなくてもよいと思ったが……闘うのならば名乗らねばならぬな。私は枢機卿^{ロード}。君と同じく……殺し屋だ。」

自らをロードと名乗った老紳士はやる気満々で構えを取った。

「来なさい若者達よ。経験の差を見せ付けよう。」

エリーのお陰で今俺は生きている。
それだけは確かだ。

自らを枢機卿^{ロード}と名乗った老紳士……いや、クソジジイは杖に仕込んでいた刀で俺を斬ろうとしていた。

もちろん先に述べたようにエリーによってその目論見は阻止された訳だが。

「今……『我々』の世界ではあなた方の話題で持ちきりです。懸賞金100億の日本人と……それに従う殺し屋のね。」

100億？

俺の首に……100億だ……！？

一体幾ら金使やぁ気が済むんだよクソ義父は！！

「それがどうしたご老体。生憎とこちらは今『そっち』の情勢に疎いのよ。いい迷惑。」

エリーが『爪』を取り出し腕に装着をした。
相変わらずゴツいな。

「教会で闘うことになるとは……罰当たりだ。敬虔な私としては罪深く思うけど……やってみたかった。」

やってみたかった、じゃねエよエリー。

「ったくよ……おいエリー！！命令だ！！」

「何なりと我が御主。」

「そいつを地獄に墮とせ。教会だろうが構わん。そいつのド頭カチ割れ！！」

祈りの構えを取っていたエリーが、ゆっくりと指を離した。
離れる際に爪同士がぶつかる金属音が静かな教会にシャン……と響く。

「聖霊と子と御主の御名に於いて……仰せのままに。」

「話は終わったかい？」

ロードは杖……もとい刀に両手を置き、長椅子に腰掛けていた。
余裕見せてやがんな……？

「そいやジジイ。テメエさつき神がどうのここの言ってやがったよなアアア？あれはウソか？」

教会であんな戯れ言吐けるようなやつならそれこそクズだ。

だが予想に反し、返ってきたのはロードの真剣な表情であった。

「ウソ……？ハハ……神の身下で私如きのウソが神を欺けるものかよ。真実だ。……ただ神は貴様等を救わんがな。」

「そりゃこつちも同じ考えだつつの。テメエも精々神にお祈りでもしてろ。死神に取り殺されねえようによ！！」

「その通りだご老体。餞別に信者の貴卿には特別な死を与えよう。」

「ほう。実に興味深い。何だねそれは？」

エリーは長い黒髪を首を振るって後ろに持っていき、右爪をロードに突き刺すように向けて一言言い放った。

「祝福された『死』だ！！」

第九走：コンスピラシー・オブ・ワン（前書き）

最近の体育でバドミントンをやった
めっちゃくちゃ面白いですねあれ

そして頑張りすぎてやりすぎて腕に力が入らなくなったのですが、
バドミントンって最速の球技なんだよね
最高300キロまで行くとか行かないとか……

そんな球をはなてるようになった時に、一体俺の腕はどうなってる
んだ……

第九走：コンスピラシー・オブ・ワン

「おおなんと！！有り難い、有り難いことに私の最期は『死神』が祝福された死を保証してくれた。ならば私は君達をどう殺そうか？」

「気を使わなくてもいいわよご老体。どうせ老い先短いのだから。」

エリーが構えを低くした。

恐らくは長椅子の陳列された足場の悪い教会で、足を狙うつもりなのだろう。

だがロードは老人とは思えぬ速さでエリーに詰め寄り手にした刀を一直線に振り下ろした。

「セア！！！」

「くっ……！！！」

間一髪、エリーは左爪でそれを受け止め、エリーの間合いに入ったロードに右爪が襲い掛かる。

「甘いな。」

間合いに入っただのはエリーも同じ。

ロードは踏み込んだ右足を軸にエリーの鳩尾に蹴りを叩き込んだ。

「くはっ……！！！」

長椅子を吹き飛ばしながら受け身も取ることもままならずエリーは床に叩きつけられる。

素早さは……どうやらロードの方が上のようだ。

「まだまだ若い。経験が足りんのでは？」

ロードは異常な跳躍を見せ、刀の切っ先を地面に垂直にし、エリーへと襲い掛かる。

ガキンとした音が教会に響く。

刀は床に突き刺さるもエリーに突き刺さることはなかった。

「まさか！？あのダメージで動けると！？」

「相変わらず体は頑丈なんでね。」

エリーの爪がロードの真上から襲い掛かった。

「ほッ！！」

老人が気合いを入れた掛け声と共にロードは後ろにジャンプし、一気に教会の奥まで辿り着いた。

「なんだよあの跳躍は……！？」

「なるほど。『異常脚力』ですか。それならば先ほどの蹴りの威力も納得です。」

「おおエリー、大丈夫かよ。」

「心配には及びません御主。頑丈が取り柄ですから。」

エリーはこちらを見てニツコリと微笑んだ。

まあ大丈夫ツつうなら俺はそれを信じるしかない。

「それはそうと御主、隠れて下さい。奴が……何かしてきます。」

エリーは構えるがロードとの距離はドア側にいる俺たちとはかなりある。

そんなに警戒するべきか？

「ヂャー!!」

ロードが長椅子の一つを蹴った。

長椅子は回転しながら有り得ない速さでこちらへと飛んできて、轟音を立てて壁に叩きつけられる。

「マジかよ……」

続けざまに幾つもの長椅子が蹴られ、ドアに積み上げられていった。
なるほど。

逃げ道をなくすつもりか。

「さあ若人よ、第二ラウンドだ!!」

逃げられない。

想定外の化け物だあれは。

蹴りで長椅子を蹴り上げて、積み上げる。

100kg以上はありそうな長椅子は丁寧に扉の前で積み上げられていた。

「規格外の怪物だぜこのクソジジイは。」

チツと舌打ちをしてロードを睨んだ。

あのジジイ、足の骨イカれねえのか？

それとも超合金Zでできてるのか？

「最早退路は断たれ、目の前には老い先短いだだの『枢機卿』。取るべき道は確定されました御主。」

「元からそれしかねえよ。」

俺がそう言つと、エリーは腰を低く落とす。

ロードも少し腰を落とし、かかとを浮かしていた。
完全に逃げの体勢に入っている。

「やり方は……………だ。どうせなら派手に行こつや。」

「承りました我が御主。」

エリーが地を蹴り、低い体制から体をバネのように弾きロードに詰め寄った。

だがロードには相も変わらず焦りなどなく、ギリギリまでエリーの攻撃を見極めんとしていた。

「ダラアッ!!」

「フン。」

エリーが下からすくい上げるように放った爪を軽いステップでかわし（この時ロードはポケットに手をつ込んだままという余裕を見せていた）、イエスが磔刑にされた大きなクロスの下まで移動していた。

「動きが直情的だな、読める。」

「うるせえですよ老いぼれ。年に合わない動きしてるんじゃないですよ老いぼれ。」

どんな攻撃も当たらなければ意味はない。

だが今は壁際まで追い込んだ。

つまりは袋のネズミと同じというわけだ。

「シャラ!!」

「ヌッ……」

エリーが突き出した爪を刀で爪の間に滑り込ませて、爪を止める。

「甘い!!」

エリーは爪の刃と刃の間に潜り込んだ刀を冷静に見つめてそう呟いた。

パキン……と綺麗な音と共にこの原理で折られた刀は無様に床に崩れ落ちる。

「さて、あなたの刃は折れました。戦意は？教会で死ねるのならば本望でありましょうご老体？」

満身の力を込めた爪が、カタカタと小刻みに武者震いをした。

そして、一旦その震えは止まったかのように思うと、引き絞られた矢のようなスピードで、ロードを穿つために繰り出された。

ザキン!!

「なあ!？」

事前動作の素振りすら見せなかったロードは、まるでその場で浮いたかのような跳躍を見せ、エリーの頭上を飛び越えた。

結果エリーの爪はロードを貫くことはなく、磔刑に処された神聖なるイエス・キリスト像の御身元の土台に突き刺さった。

「罰当たりな。イエス様の御身元に爪を立てるとは。まるで真実の口に手をつ込んだ嘘つきのようだ。どうせ爪を立てるならベッドの上でその男の背中に立てればいいものを。」

「クソ、ジジイ!!」

普段敬語で接してくるエリーには似合わないような雑言。

ロードはさして気にせずゆったりとした動作で俺へと近付いてくる。

つかエリー、作戦通りにいけよテメエよ。

「止まれ。じゃねえと頭スツ飛ばす。」

俺が取り出したのはなんてことのない、ヤクザの必需品ハジキだ。マカロフだがまあ人が殺せるならなんでもいい。

ドタマぶち抜きやあ人はくたばるし、心臓ぶつ飛ばしやあ嫌でもあの世行きだ。

「そんなものが、当たるとでも?」

「当てなきゃマジインだよ。」

銃を構えたまま、やつが来るのを待っていた。

やつが近付くのを……だ。

「いいか？一つ教えてあげよう『若僧』。私が近付くにつれて命中率が上がると思うな。どんな距離で発砲しようとも、私はその一手先を読んで弾丸をよける。君にもわかるはずだ。『カスパールの魔弾』でも用いない限り私に弾丸を当てるなど不可能なんだよ。」

「そうかい、ご丁寧にご高説どうも。なんなら試してみるか？」

俺はロードに向けていた銃口を教会の天井に向けた。

ロードもそれに従い上を見上げる。

「『天を見上げる狩人は、空の鷹を射抜くのに必死で。目の前の鹿を仕留められない、地を這う蛇に気づかない。』知ってつか、この話をヨ？」

俺が饒舌に演説をし終えるのと、ロードが気付いたのはほぼ同時だった。

注意が一瞬でも引けりゃあ十分だったのだ。

サクリ、と。

ジジイの膝に刃物が刺さる。

それはエリーから投げられた、『蛇』

「つまりはそーいう事だご老体。」

ロードの体が、ドサリと崩れ落ちた。

第十走：ユダ（前書き）

お詫び

前回の話の『第九走：コンスピラシー・オブ・ワン』の内容を今回の話と間違えて投稿してしまいました
話の辻褄が合わず読まれた方には大変御迷惑をお掛けしました
大変申し訳ありません

以後このようなことがないように、細心の注意を払い執筆していきます
これからも『守護する御主はギャングスター』をよろしくお願いします
ます

第十走：ユダ

「詰まるところハデに殺って逝こうやって、話なんだよご老体。」

銃口はロードに向けたまま、倒れ込んだロードを見下ろした。

右膝にはロードの折れた刀の刃が突き刺さっている状態だ。

膝は人体の急所であるためダメージを受ければ立ち上がることは出来ない。

だがそこはさすが裏世界の殺し屋だ。
残った足で逃げようと試みている。

「落ち着けよ。」

まあ俺がそれを見逃すほどバカではない。
残った片足を打ち抜いて、もう一度床に膝をつかせた。

「ぐっあ……！！」

「その位置がよお、凄くいいんだ。動かないでくれや。それにさ
つきお前が俺の弾丸避けれるって言った自信くらいに、俺はお前
に弾丸ブチ込む自信があんぜ？」

この距離なら断じて外さない確固たる自信がある。

「で、話の続きだ。ハデにやるってことはな、堅気じゃあない世界
じゃ重要だね。いっちょお前もハデに死んでもらうかなと。」

「若造が吹きおつて……！！人を殺したことはない貴様が軽々しく殺すなど……」

「あるよ。」

スライドを引きながら極当たり前のように答えた。

「いくつだと思ってんだ？場末のガキじゃねえんだ。殺人なんか息をするのと同じなんだよ。」

かの有名な連続殺人犯、ヘンリー・ルーカスの言葉だ。

啞然と口を開くロードからは滝のような汗が流れている。

「上を御覧あれご老体。」

くく……つと銃口を上に向け、ロードの視線を上へと誘う。

その先に佇んでいるのはシャンデリア以上の大きさを誇る巨大な燭台。

「分かるよな？その『位置』がいかに大事かってことが。」

ダンツと一発鉛玉を弾き、燭台の鎖を破壊した。

支えるバランスを失った鎖はバチン！！と普段聞き慣れない、金属の破断する音を立て、燭台も重力に従ってロードへと降りかかった。

「アアッ ア アアア アア ……」

「幕引きだ!!」

ロードの断末魔は盛大な音を立てる燭台に掻き消された。
同時に教会には衝撃が走る。

「でえじょうぶかエリー？」

「ええはい。なんとか。」

爪を右手でまとめ持ちをし、ベツと血反吐を吐きながらエリーが答えた。

「決めたのは御主ですか。なんか悔しいですね。」

「ナイスアシストだったぜ。長年連れ添った夫婦みてえな息の良さだ。」

「……それは重畳ですね……。」

言いよどむエリーの頬には確かに赤みが挿していた。

結構なレア顔だなこれは。

「さて……疲れたし一度宿に戻って態勢を立て直すとすつか。」

「随分とのんびりしてますね。」

どこか呆れが入った言い方だが仕方がない。

エリーがこんなでまた新しい刺客が来たらたまったもんじゃねえ

からな。

「行き先が決まってねえかなあ。ゆっくり行くしかねえだろ。」

「……あなたには何も言えません。」

あれ？

完全に呆れられたかな？

「おゝありがとよ。……ところでタバコキレたんだけどよ、買ってきてくんねえかな？セツタな。」

どっこにもねえんだよなあ。

セブンスターのボックスがよー！

「御主……あの……お言葉ですが……私、タバコにはあまり詳しくなくて……それに私は御主の武器であって……その……パシリでは……」

ゴチャゴチャうるせえなあ……

「あ？ああセツタつつうのはセブンスターのことな。マイセンと違うかな。あとボックスだから。」

どっこ落としたンかなあ……

いや……つつかこんなへキ地にタバコあるわきやねえか。

日本の通貨も使えねえつつうのに。

「うつしエリー、一旦街に戻ンベや。何時までもこんなヘキ地にいるわけにもいかねえしな。」

「教会をヘキ地呼ばわりですか……もう御主の性格がイマイチよく掴めなくなってきました……」

ため息をつきながらも俺の後を付いて来るエリー。
お疲れだしパシリはナシにしといてやるか。

「ところで御主……御主は銃の扱いには手慣れておられるのですか？」

「当たり前ヨ。高校生つつつてもな、バイク乗り回してアホやつてるやつらとはワケが違უნだよ。」

教会を出た後はエリーと他愛もない話をしながら街へと戻った。

「街へ戻られたらどうなさいますか？」

「ひとまず身なり整えてえな。もつとマシなやつによ。買いもんでもするかよ？」

実際の所、ほぼ着の身着のままで出立した俺だ。
制服つつうのは何かと目立つし何よりもダサい。

ダサいっつうもんは直さないといけないものだ。

「だって見てみるよエリー。服ダセえだろ？ダセエ格好するってえのはな、ガマンできねえことなんだ。わかんだろ？」

「そうですかね？御主は素材が十分いいので……私はあまり気にしませんか……。」

「……あながとよ。」

面と向かって言われると照れるなオイ。
とりあえず今日の宿探すか……

シリリリリリ！！

シリリリリリ！！

ガチャ

「ハイハイ親切的確、即日配達、裏のインフォメーションセンター
『ユダ』ですが？」

懐かしの黒電話の受話器を取ったのは柄の悪いアメリカンな女性。
声からして若いのが窺えるが生憎と電話の相手には変声機を使用し
ているため年どころか性別の判断すら付かない。

『密告者、^{ユダ}密告者……奴らの居場所は……？』

妙に低い男の声がユダの耳に入る。

「奴ら？奴らつてのはアレか？100億の首か？大人気だなそいつ
らは。あのイカレ女のシュレッダーもくたばり損ないのロードもハ
ウシンカの大御所からも電話来たぜ？あんたと全く同じ内容で奴ら
の場所を聞きやがる。私はヘルメスじゃねえつつうの！！」

既に冷え切ったデリバリーピザの一切れを口にほおばりながら文句
を垂れる。

『グチるなユダ。その分アンタも儲かるだろ……？』

「アホ垂れンな。不特定多数に情報売るってえのは綱渡りなんだよ。

」

同じ情報をたくさん奴らに売るというのは裏切り行為と同意だが、
ユダの居場所を特定できる者が居ないため大した問題ではない。

「で、ビジネスの話だ。あいつらの居場所は分かる。あとは『誰か

さん』のお名前を聞いて取引終了だ。」

『……………レターボムだ。』

名を聞いた途端、ユダのピザを運ぶ手が止まり、笑い声が響く。

「ハツハハアこいつぁいい。今度はMr・ベトナムか。ヤー、講座に振り込んで。あいつ等は今上海にいる。ロードが殺してなけりやあな。」

『関係ない。ロードが邪魔するならケツの穴にポテトマッシャーを突っ込んでボン菓子みたいに黄浦江まで飛ばしてやる。』

「ククッ、精々頑張りな。ところで私のところの電話、黒電話なんだけどシブいだろ？音がたまんねえのよ。」

『……………そういう話はな、ユダ。俺以外の誰かにしろ。そこらの野良犬かホームレスでもいい。じゃあな。』

素っ気なく切られた電話をユダは睨みつつも受話器を投げて元の状態に戻した。

「クソつまんねえ男だな。」

多く残ったピザの最後の一口をンガツと口にほおばり、ユダは悪態をついた。

逃走と闘争八日目

教会の半壊

燭台の全損

ロードの死亡・圧殺

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4727f/>

守護する御主はギャングスター

2010年10月31日14時14分発行